AL NEWSLETTER
アクティブラーニングニュースレター
Volume 10, No. 1
June 2024

～ 目次 ～

◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
◆ EX 部門活動報告
・ アクティブラーニング型授業モデルの開発(p.1)
・ ワークショップの開催(p.4)
◆ 今後の活動予定(p.5)

## ◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS、東京大学駒場キャンパス 17 号館 2 階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとりいれる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門（旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設）までお問い合わせください。（若杉）

## ◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（若杉）

## ◆ EX 部門活動報告

2023 年度後半の EX 部門のアクティブラーニング関連の活動を紹介します。

### アクティブラーニング型授業モデルの開発

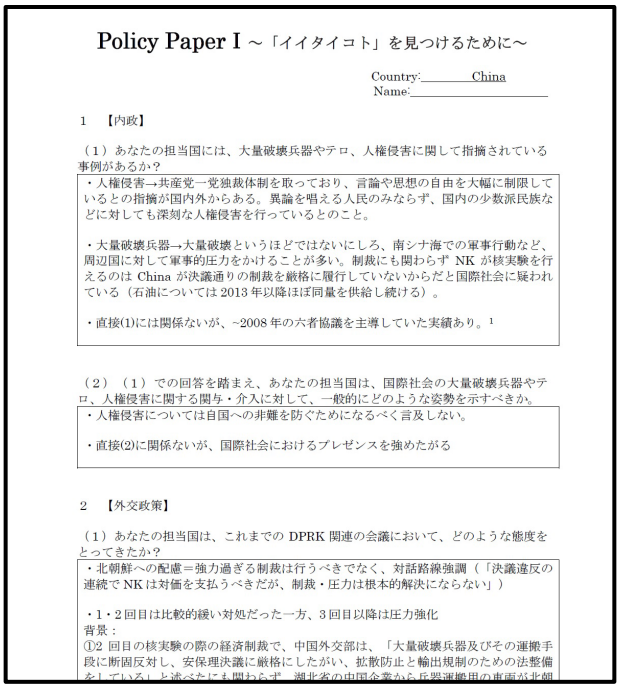
EX 部門では、授業の開講を通して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。2023 年度 A セメスターは、4 授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型授業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

#### (1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 I

「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 I」（担当教員：中村長史）では、模擬国連（Model United Nations）というアクティブラーニングの手法を用いて、国際問題の解決法を考えました。多様な利害・価値観に配慮することの重要性を理解するには体感してみることが早道ですが、模擬国連の会議では、一人一人が米国政府代表や中国政府代表などの担当国になりきって国際問題について話し合います。立場を固定されている点ではディベートと同様です。しかし、相手を論破することで勝利を目指すディベートと異なり、模擬国連会議では合意形成が目的であるため相手の利害・価値観を尊重したうえでの妥協が重要になります。この点を重視し、授業内では対立の激しい議題（2003 年のイラク戦争直前、2017 年の朝鮮民主主義人民共和国による核実験時の国連安全保障理事会）・担当国を設定して、ロールプレイ・シミュレーションに取り組みました。

2019 年度より毎学期開講しており、今回は 8 期目の開講となりましたが、受講者は 13 名（1 年生 7 名、2 年生 6 名）でした。なお、例年は S セメスターに I、A セメスターに II を開講していますが、2023

年度は担当教員の他の授業との兼ね合いから、Ⅰ・ⅡともにＡセメスターに開講しました。



Policy Paper Ⅰ ～「イイタイコト」を見つけるために～

Country:_____China
Name:_____

1　【内政】

（1）あなたの担当国には、大量破壊兵器やテロ、人権侵害に関して指摘されている事例があるか？

・人権侵害→共産党一党独裁体制を取っており、言論や思想の自由を大幅に制限しているとの指摘が国内外からある。異論を唱える人民のみならず、国内の少数派民族などに対しても深刻な人権侵害を行っているとのこと。

・大量破壊兵器→大量破壊というほどではないにしろ、南シナ海での軍事行動など、周辺国に対して軍事的圧力をかけることが多い。制裁にも関わらず NK が核実験を行えるのは China が決議通りの制裁を厳格に履行していないからだと国際社会に疑われている（石油については 2013 年以降ほぼ同量を供給し続ける）。

・直接(1)には関係ないが、~2008 年の六者協議を主導していた実績あり。[1]

（2）（1）での回答を踏まえ、あなたの担当国は、国際社会の大量破壊兵器やテロ、人権侵害に関する関与・介入に対して、一般的にどのような姿勢を示すべきか。

・人権侵害については自国への非難を防ぐためになるべく言及しない。

・直接(2)に関係ないが、国際社会におけるプレゼンスを強めたがる

2　【外交政策】

（1）あなたの担当国は、これまでの DPRK 関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

・北朝鮮への配慮＝強力過ぎる制裁は行うべきでなく、対話路線強調（「決議違反の連続で NK は対価を支払うべきだが、制裁・圧力は根本的解決にならない」）

・1・2 回目は比較的緩い対処だった一方、3 回目以降は圧力強化
背景：
①2 回目の核実験の際の経済制裁で、中国外交部は、「大量破壊兵器及びその運搬手段に断固反対し、安保理決議に厳格にしたがい、拡散防止と輸出規制のための法整備を」でいる」と述べたにも関わらず、湖北省の中国企業から兵器運搬用の車両が北朝

**学生が作成した Policy Paper の例（会議前の準備）**

履修者の感想としては、次のものがありました。

- 各国が狭い意味での国益だけではなく国際社会からの印象も気にして動いているということや、安保理でも必ずしも「米英仏　対　中露」とはならないということを学んだ。
- 国際社会において、各国は多様な選好を持っており、そのような社会において何らかの紛争が発生した際、解決は容易ではないと考えられる。それにも拘わらず、国際会議では各国の妥協による合意が図られる。国際会議は権力政治・国際共同体の両側面を持ち合わせた「政治」の場であると気づいた。
- 交渉は、相手の団結をいかに切り崩すかが大事だと学びました。逆説的に、自陣営における団結を通して、仲間が脱落するのを防止することは大事であると考えました。
- 公式と非公式の使い分けが大事であること、具体的には、公式では言えない議題を非公式で交渉したり、公式発言の表現や決議案の文言には注意しなくてはいけなかったりすることを学んだ。
- 史実を自分ごととして読み込むことはこの会議に参加していないとできなかったことだと思います。例えば、決議案を見てただ事実を知識として取り入れるのではなく、この文言を日本だったらどう捉えるだろうともう一歩踏み込んで考えるようになりました。

本授業の目的に関し、国際関係の知識定着・合意形成の技能習得の両面において一定程度達成されていることがうかがえ、安堵しています（中村）

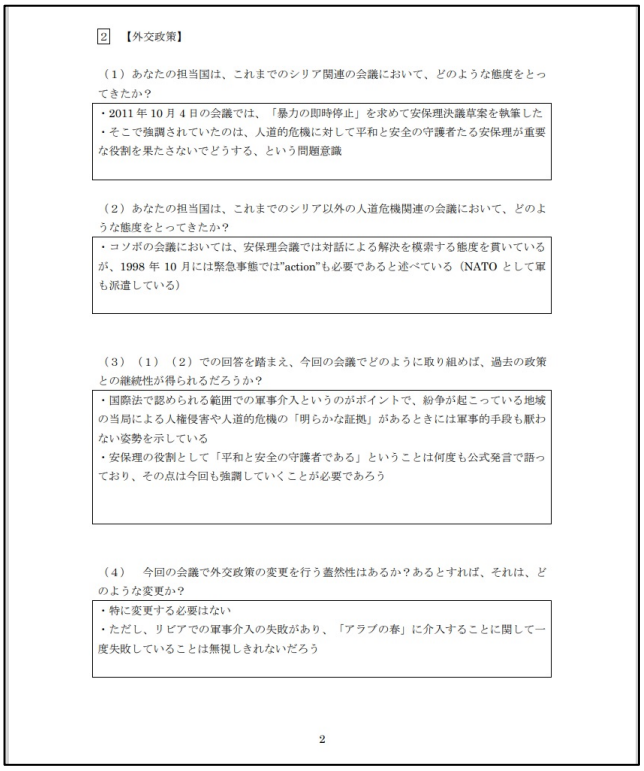
## (2)全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅱ

「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅱ」（担当教員：中村長史）では、Ⅰと同様の目的で、模擬国連の手法を用いて、国際問題の解決法を考えました。2019 年度より毎学期開講しており、今回は 9 期目の開講となりましたが、受講者は 26 名（1 年生 21 名、2 年生 4 名、3 年生 1 名）でした。

授業は、2 部構成としました。第 1 部「シリアの人道危機」（第 2～7 回）では、2010 年代を通して続いているシリア人道危機についての国連安全保障理事会のシミュレーションを行ないました。第 2 回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第 3 回から第 6 回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国（シリア政府擁護派）、フランス（シリア政府批判派）、ロシア（擁護派）、英国（批判派）、米国（批判派）の 5 つの常任理事国に「中間派」の南アフリカを加えた 6 ヶ国を設定し、1 ヶ国を 2・3 人で担当しました。現実の会議と同様、拒否権が行使され、決議案は廃案となりました。

第 7 回では、まず、このような会議の内容について、担当国の立場から振り返り、自国の利益をどの程度反映できたか、より適切な政策立案・議論・交渉等はなかったかを検討しました。そのうえで、個人の立場から会議を振り返り、国際社会全体の利益のために、どのような方法があり得る（た）のかを議論しました。2 つのふりかえりを踏まえて、受講者は授業外でレポート 1 に取り組みました。

第 2 部「女性、平和、安全保障」（第 8～12 回）では、「テーマ別会合」（国連安全保障理事会では、シリアのような特定の事態のみならず、「テーマ別会合」と呼ばれる一般的な議題も扱われます）の一つである「女性、平和、安全保障」のシミュレーションを行ないました。第 8 回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第 9 回から第 11 回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国（現実世界では棄権）、フランス（賛成）、ロシア（棄権）、英国（賛成）、米国（賛成）の 5 つの常任理事国にドイツ（賛成）、インドネシア（賛成）を加えた 7 ヶ国を設定し、1 ヶ国を 3・4 人で担当しました。多様な文化・宗教・利害を持つ国々の間でリプロダクティブヘルス/ライツや、安保理で人権問題を話し合うことの是非等をめぐって議論・交渉が繰り広げられましたが、現実世界とは異なり、全会一致で決議案が採択される結果となりました。第 12 回では、シリアの際と同様、担当国の立場と個人の立場から、それぞれふりかえり、授業外でレポートに取り組みました。



2 【外交政策】

（1）あなたの担当国は、これまでのシリア関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

・2011 年 10 月 4 日の会議では、「暴力の即時停止」を求めて安保理決議草案を執筆した
・そこで強調されていたのは、人道的危機に対して平和と安全の守護者たる安保理が重要な役割を果たさないでどうする、という問題意識

（2）あなたの担当国は、これまでのシリア以外の人道危機関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

・コソボの会議においては、安保理会議では対話による解決を模索する態度を貫いているが、1998 年 10 月には緊急事態では"action"も必要であると述べている（NATO として軍も派遣している）

（3）（1）（2）での回答を踏まえ、今回の会議でどのように取り組めば、過去の政策との継続性が得られるだろうか？

・国際法で認められる範囲での軍事介入というのがポイントで、紛争が起こっている地域の当局による人権侵害や人道的危機の「明らかな証拠」があるときには軍事的手段も厭わない姿勢を示している
・安保理の役割として「平和と安全の守護者である」ということは何度も公式発言で語っており、その点は今回も強調していくことが必要であろう

（4） 今回の会議で外交政策の変更を行う蓋然性はあるか？あるとすれば、それは、どのような変更か？

・特に変更する必要はない
・ただし、リビアでの軍事介入の失敗があり、「アラブの春」に介入することに関して一度失敗していることは無視しきれないだろう

2

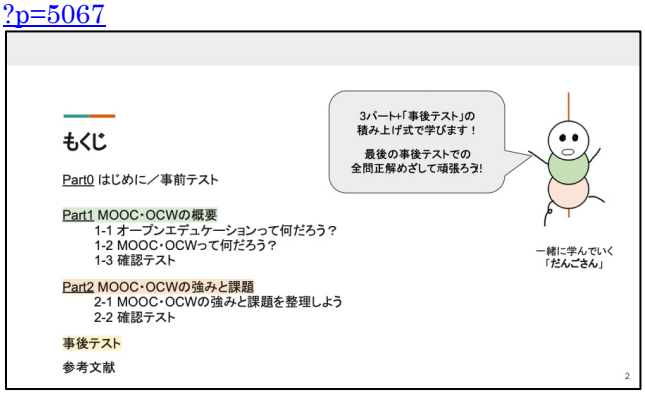
**学生が作成した Policy Paper の例（会議前の準備）**

第 13 回のまとめでは、各自が模擬国連から学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「国際関係について学習する際には、大局を捉えるために細かい利害関係を捨象することが多かったが、今回の授業では文言調整等の細かい作業において同一陣営間の微妙な差異が多々存在することを学んだ」、「同じ考えの国と足並みを揃えつつ、他国の動きにも注意を払い、対立する国とも中立的な国を通じて交渉をするなど、幅広い視野を持って会議を進めていくことが大切だと学んだ」、「国際関係論の授業を今学期に履修していたこともあり、理論として学んだことが現実にはどのように働くのかを学ぶという学問面、将来国際交渉の場で働きたいと考えているのでその経験を積むという個人的な側面からも学習効果は大きかった」といった感想が寄せられました。これらの感想ならびにレポートの内容から察するに、授業の目的が一定程度達成されたようであり安堵しました。（中村）

## (3) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 「オープン教材」をつくろう！

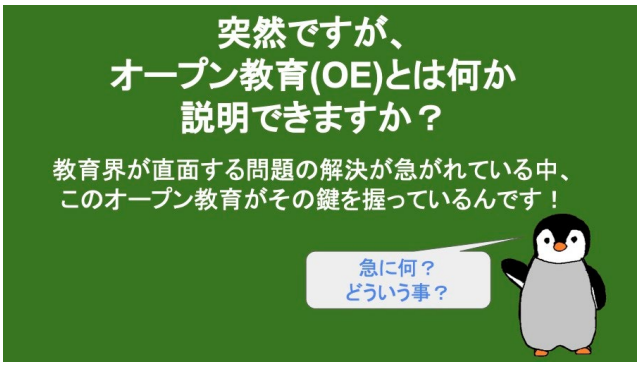
この授業ではまず、オープンエデュケーションやオープン教材の定義・特徴・事例を、ゲスト講義を交えながら学びます。その後、教材設計理論を学んだうえで、オープンエデュケーションやオープン教材について学べる教材を作り、オープンエデュケーションやオープン教材についての理解を深めます。

学生は、教材設計理論を学んだ後、自分の興味関心が近い人たちとグループになり、教材づくりを開始しました。今回は、5 グループに分かれて教材をつくりました。出来上がった教材は、ロールプレイングゲームを援用したものや、ガイド役のキャラクターを使用したものなどでした。「オープンエデュケーションやオープン教材について学べる」という共通のテーマにもかかわらず、多種多様な教材が完成しました。受講生が作成した教材の一部を部門ウェブサイトで公開しました。 至らぬ点もあるかと思いますが、ぜひご覧いただき、またご自身のオープンエデュケーションに関する学習に役立てていただけますと幸いです。https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/news/?p=5067




**学生が作成した教材①**

**（By 佐野真途中, Y.M., 金井貴広 CC BY NC ND4.0 ）**




**学生が作成した教材②**

**（By Y.A, 蔵田渉, T.T CC BY NC ND4.0）**

授業方法では、Google スプレッドシートを使っていた大福帳を、Slack で行うことにしました。UTokyo Slack に授業のワークスペースをつくり、大福帳のワークフローを設定しました。一人の学生と教員だけがメンバーとなるプライベートチャンネルを設け、学生はそのチャンネルでワークフローを使い大福帳を送信しました。送信した内容はプライベートチャンネルに投稿される設定にしているため、教員はそのメッセージに返信して大福帳を返却しました。

すべての授業が終了した後に Slack での大福帳を使った感想を尋ねたところ、Slack によるやりにくさに関する記述は見られませんでした。「たいへん使いやすい」、「簡単に授業の振り返りができ良かったと思う」などの感想が得られました。教員としても使い勝手は良く、リアクションで感情を端的に

伝えられるのはスプレッドシートとは異なる利点だと感じました。今後も Slack での大福帳を取り入れたいと考えています。（中澤）

### (4) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 未来の学びを考える【理論と事例編】

「未来の学びを考える【理論と事例編】」（担当教員：中澤明子）では、教育・学習について過去や現在の状況を理解した上で、10 年後の未来の学びがどうなるかを自分なりに考えること、そしてその過程で自身の教育・学習経験をふり返って教育・学習の理論に位置づけることを目的としました。教育・学習の理論やトピックに関するジグソー法での議論（第 2 回～第 5 回）、学校現場の先生や研究者によるゲスト講義（第 6 回～第 8 回）、ブロックを使った自身の経験の可視化と授業で扱ったトピックや事例との関連づけ（第 9 回）、グループでの議論と最終発表（第 10 回～第 13 回）を行いました。第 10 回以降は、グループごとに「10 年後の未来の学びがどうなるか」を考え、学びの一場面を発表するための準備を行いました。その際、「人間 ChatGPT」を行いました。すでに「人間 ChatGPT」について触れていますが（AL NEWSLETTER Vol.9, No.4）、ここでは具体的な活動内容を紹介します。

グループで「10 年後の未来の学びがどうなるか」を議論する際、学生は「ほかのグループから意見をもらいたい質問」を考えました。授業開始から 50 分ほど経った時に、「人間 ChatGPT」を始めました。この時は、3 グループありました。「人間 Chat GPT」を始める前に、グループの中でホスト役と、ホスト役以外のグループメンバーが 2 つのグループのうちどちらに行くかを決めてもらいました。その後、ホスト役はそのままグループに残り、ほかのグループメンバーは別のグループに移動しました。そして、各グループのホスト役の学生が「ほかのグループから意見をもらいたい質問」を提示し、学生はそれに対するコメントやアイデアを述べました。ホスト役はコメントやアイデアを記録する役割も担いました。「人間 ChatGPT」の時間が終わると、学生は自分のグループに戻ります。そして、ホスト役の学生が、もらったコメントやアイデアをグループメンバーに共有し、グループでの議論を継続しました。

これは、ワールドカフェのやり方を参考にして行った学習活動です。グループワークを複数の授業回にわたって行うような授業の場合、グループワークが行き詰まったり、だらけてしまうことがあります。グループメンバーだけでは解消できないことを、他の学生に問いかけることで解決の手がかりを得る目的で行いました。

また、グループで議論する際には、生成 AI の利用を許可しました。本学の方針を示し、グループメンバーの一人のような形で生成 AI に相談したりアイデアをもらうことは問題ない旨を伝えました。この授業では、最終発表方法を学生自身に決めてもらいました。スライドを使ったプレゼンテーションを行うグループもあればスキット（劇）を行うグループもありました。あるグループは、自分たちが考える未来の学びのイラストを生成 AI に作成してもらい、それを解説する形で発表しました。自分たちが考えている未来の学びの場面になるよう、何度も生成 AI と対話していました。生成 AI の回答をそのまま自分の回答としてレポートなどに利用することは禁止されていますが、自分の考えを可視化するためのツールとして使い、発表に利用する場合はどうでしょうか？思い通りのイラストになるように指示を与えることは、自分の思考を書き出すことになります。思考を書き出す中で自分の考えを深めることにも繋がるかもしれません。教員自身が生成 AI の活用場面やその是非を考える学習活動となりました。（中澤）

## ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを企画しています。2024 年 2 月と 3 月に次の 2 つのワークショップを開催しました。これらについて簡単にご報告します。

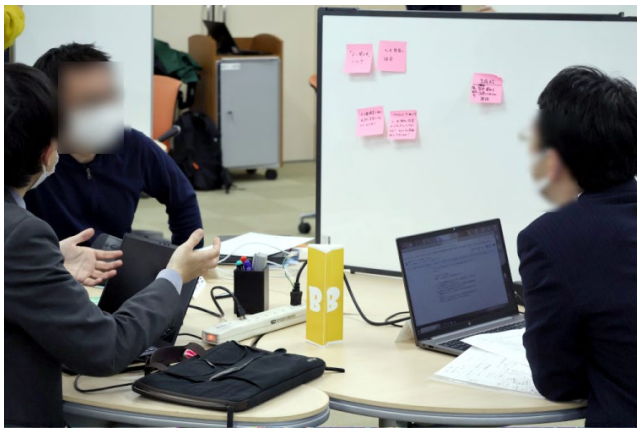
### 駒場アクティブラーニングワークショップ「アクティブラーニングで生成 AI を活用する：事例の共有と検討」（2024 年 3 月 19 日）

東大で授業を担当されている先生方を対象に、駒場アクティブラーニングワークショップ「ジグソー法を授業で活用する：事例の共有と検討」を対面で開催し、19 名の方が参加されました。前回から引き続き生成 AI の活用を取り上げました。

ワークショップの趣旨説明を行った後、自己紹介と導入ワークを行いました。導入のワークでは、差参加者はワークショップへの参加動機を生成 AI に尋ね、得られた回答に賛成/反対なのかや感想を考えグループで共有しました。その後、ミニレクチャとしてアクティブラーニングの定義やアクティブラーニングで生成 AI を活用する際のポイント、活用事例を講師の中澤が説明しました。説明の最後に、導入ワークは紹介した活用事例の活動であったことを述べ、参加者は学習活動を体験して感じた点をグループで議論しました。

ディスカッション後は、中村長史特任講師、岡田晃枝特任准教授から、授業での活用事例を紹介していただきました。

休憩を挟んだ後半は、授業デザインワークを行いました。授業デザインの流れを確認したうえで、参加者自身の授業目的・学習目標を思い出してもらい、授業をアクティブにする方法やアクティブにするために生成 AI を使えそうか、どのように使うかを参加者が考えました。個人で考えた後、参加者は考えた内容をグループで共有しました。



**ふり返りワークの様子**

最後に、ワークショップのふり返りとして新たに出てきた疑問・知りたいことを付箋に書き出してグループで共有し、ワークショップを終えました。

ワークショップ後のアンケート（17 名が回答）では、「本ワークショップで学んだことを自分の授業準備・実施で活用できると思う」という質問に対して、まったく当てはまらない～かなり当てはまるの 5 件法で尋ねたところ、17 名中 11 名がかなり当てはまる、6 名がまあまあ当てはまると回答しました。 一方、ワークショップで改善したほうがよい点については、時間配分や、具体的な生成 AI の活用に関するワークの要望が挙げられました。今後も生成 AI の活用について先生方に有用な情報を提供していければと思います。（中澤）

## 第 8 回 模擬国連ワークショップ（2024 年 2 月 22 日）

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅰ・Ⅱ」を踏まえて開催したものです。学内外 の大学・高校教員を対象として 2019 年度から実施し ており、今回が 8 回目となりましたが、37 名の参加者が駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS）に集いました。 対面での開催は、実に 4 年ぶりとなりました。

ワークショップは 2 部構成としました。セッション 1「模擬国連の授業事例から学ぶ」では、模擬国連の概要と本学教養学部の授業への導入例について中村からお話しました。中村の授業では、模擬国連を通して、国際関係の知識と合意形成の技能の習得を目指していることを強調したうえで、議題や担当国についての学生の調査・分析を促す方法等について紹介しました。導入目的を明確化する必要があるという点を参加者間で再確認する機会となりました。

**セッション 1 の様子**

セッション 2「国連外交の実務事例から学ぶ」では、嘉治美佐子大使（外務省参与、元国際労働機関（ILO）理事会議長、元総合文化研究科教授）から、国連等の国際機関での交渉の様子についてご紹介いただきました。セッション 1 で模擬国連を通して合意形成の技能を習得することの重要性について触れたところでしたが、外交の現場でも合意形成が重視されていることについて、ご自身の経験を踏まえてお話いただきました。国際会議においては、リーダーシップのみならずフォロワーシップもまた重要だというご発言が印象に残りました。

参加者からは、「Taylor-made の模擬国連という考え方に触れられて、まずは目的をきちんと固めようと思った」、「外交の現場での合意形成について聴いた話を生徒にも伝えたい」、「オンラインもよいが、やはり対面開催の機会があると情報交換がしやすくてよい」といった声をいただきました。こうした声を励みに、2024 年度も実施していく所存です。（中村）

## ◆ 今後の活動予定

2024 年度 S セメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また 9 月に再びワークショップを開催する予定があります。オンライン授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト（https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/）で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

（奥付）
○発行年月日：2024 年 6 月 25 日
○発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX 部門
若杉桂輔・中澤明子・中村長史
○連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
○Web サイト：https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/